

## ローマ人への手紙9章 「イスラエルのつまずき」

### 1A 同胞が福音を受け入れない痛み 1-5

### 2A 選びによる神の計画 6-29

#### 1B 召しと選び 6-13

#### 2B 陶器師なる神 14-23

#### 3B 異邦人への選び 24-29

### 3A 義の求め方 30-33

## 本文

ローマ人への手紙 9 章を開いてください。私たちの学びは、パウロの宣べ伝えている福音の、いわば「骨」の部分に入ります。それは、「神のイスラエルの救い」であります。9 章から 11 章までに至っています。

私たちは 8 章において、神のご計画の確かさを見てきました。神は、ご計画に従って、全てのことを働かせて益としてくださいます。そして、あらかじめ私たちをキリストに似る者として定めてくださり、栄光の姿に変えられることも計画してくださいました。それゆえ、どのような被造物も、私たちに敵対することはできず、私たちをキリスト・イエスにある神の愛から引き離すことはできません。キリストを信じる者に対する祝福と約束は、このように栄光に満ちています。

ところが、大きな問題が立ちはだかっています。これらの祝福と約束は、聖書によると、まずユダヤ人に与えられているものなのに、彼らの多くが受け入れていないからです。パウロは、この手紙を書き始めるとき、「1:16 私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」と言いました。ユダヤ人がまず、この祝福にあずかるはずなのです。しかし、パウロは「すべての人に」という言葉をずっと強調していきます。ユダヤ人も、ギリシア人もみな罪の下にいと話ししました。ユダヤ人と異邦人には差別がなく、ただキリストのところに来て、その信仰によって義と認められることを論じていました(3:22)。

けれども、そもそもこの祝福は、主はアブラハムを召され、約束の子イサクがいて、さらにヤコブが選ばれて、ヤコブからの十二人の息子から出てきた十二部族に救いを与える約束でした。主は、「マタ 10:6 むしろ、イスラエルの家の失われた羊たちのところに行きなさい。」と言われていました。ところが、イスラエルの指導者たちが、イエスをメシアとして受け入れませんでした。それによって、イエス様は彼らから退かれることを宣言されました。「マタイ 21:43 ですから、わたしは言うておきます。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ民に与えられます。」そして主は、復活された後に弟子たちに対して、「28:19 ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」と言われたのです。もはやイスラエルではなく、あらゆる国の人々を弟子としなさい

いと言われたのです。約束が与えられたイスラエルにその約束が実現せず、約束されていなかった異邦人がかえって、この方を信じて祝福を手にしていたのです。

使徒の働きにおいても、このことが現実化していきます。パウロの一行は、新しい宣教地に来ると、必ずユダヤ教の会堂で福音を宣べ伝えました。そこでユダヤ人も信じますが、多くが拒み、パウロに対して妬みに燃えます。けれども、ユダヤ教の改宗した異邦人や、神を敬う人々がかえってイエス様を信じていきました。拒んでいるユダヤ人たちに対して、パウロは、はっきりと語りました。「13:46…神のことは、まずあなたがたに語られなければなりません。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。」

そして新約聖書の時代だけでなく、今に至るまで、ユダヤ人の大半がイエス様を信じていません。私が初めてイスラエルに行った時に、メシアニック・ジューと呼ばれる、ユダヤ人でイエス様を信じている方に会いました。「日本は、キリスト者の人口が全体の 1%しかいません。」という、彼は、「私たちは 0.1%しかいません。」と答えてきました。日本人がなかなか信じないとぼやいてしまう私たちですが、ユダヤ人はもっと難しいのです。

このように、神の救いのご計画が確かであるはずなのに、イスラエルが拒んでいるという現実にはパウロが圧倒されています。イスラエルに対する神の選びがどうなったのでしょうか？神の選びが確かなものでなければ、神の正しさが歪められてしまいます。福音には、神の義が啓示されると 1 章でありましたね？そこで 9 章から 11 章までにおいて、イスラエルに対する救いについて論じているのです。この救いが確かなものでなければ、そもそもイスラエルを選ばれた神の義も疑わしくなり、私たちを救われた神の義もどこまで確かなのか、怪しくなってしまいます。

ですから、私たちはこの捻じれ現象を真正面から取り組むことによって、初めて福音の骨格を自分のものとしてできるのです。ちょうど魚に例えれば、骨の部分です。1 章から 8 章までは肉でした。そして 12 章から 16 章までも肉です。そのまままっすぐに信じ、受け入れればよいものです。9 章から 11 章までが、私たちの理解をはるかに超える神の思い計らいなので、圧倒されるのです。でも、肉と肉の間の骨があるからこそ、魚が魚として生きることができるのです。9 章から 11 章にある、イスラエルに対する神の救いを知ることで、ようやく福音の中に芯が入れられることになります。

#### **1A 同胞が福音を受け入れない痛み 1-5**

<sup>1</sup> 私はキリストにあって真実を語り、偽りを言いません。私の良心も、聖霊によって私に対し証していますが、<sup>2</sup> 私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。

パウロは、自分の心の内にある痛みを明かしていきます。これは、真実であると強調しています。「私の良心も、聖霊によって私に対し証しています」と言っていますが、これはとてもユダヤ的な

言い方で、二人、三人の証人を呼び寄せているのです。良心が一つの証人だし、聖霊がもう一人の証人であられる、ということです。

パウロはユダヤ人の不信仰を明らかにし、異邦人の救いを証言していく中で、ユダヤ人を憎んでいるのではないかという批判を受けていたのではないかと思われます。ユダヤ人から迫害を受けました。だからパウロが、ユダヤ人を憎んでいるのでは？と考える人がいたかもしれませんが、決してそんなことはなく、むしろ、彼らに対する愛は、とてつもなく激しかったのです。

<sup>3</sup> 私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。

8章の最後で、「8:39 どんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と言ったのにも関わらず、ここでは、引き離されてよいと言っています。ここには、パウロの同胞の民に対する熾烈な愛、執り成しの心があります。彼らが呪われた者になってしまうなら、私が代わりに呪われた者になることを願うほどの愛です。モーセがかつて、イスラエルの民が金の子牛事件で次々と死んでいってしまった時に、執り成したことです。「出32:31-32 そこでモーセは【主】のところに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯しました。自分たちのために金の神を造ったのです。32 今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら――。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。』」

<sup>4</sup> 彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法の授与も、礼拝も、約束も彼らのものです。<sup>5</sup> 父祖たちも彼らのものです。キリストも、肉によれば彼らから出ました。キリストは万物の上にあり、とこしえにほむべき神です。アーメン。

イスラエル人に与えられている霊的な祝福を列挙しています。第一に、彼らは子とされました。主はモーセに、「出4:22 イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。」と言われました。私たちは、子となる身分が与えられましたが、それは元々、イスラエルへの恵みでした。第二に、彼らには「栄光」が与えられました。イスラエルが荒野を旅しているとき、昼は雲の柱が彼らを導き、夜は火の柱が与えられました。幕屋が建てられてからは、主は至聖所においてご自分の栄光を現わし、民の真ん中にとともにいてくださいました。私たちは今、神の栄光をおおいに望んで、喜んでいますが、元々は彼らのものなのです。

第三に「契約」です。神はイスラエルと契約を結ばれ、その関係を揺るぎ無いものとされました。最初に、アブラハムに契約を与えられました。そしてモーセによる契約もあります。さらに、神はダビデに対して、その王座からメシアを出すという契約を結ばれました。さらに、預言者エレミヤをとおして、モーセに与えられた古い契約に代わる、新しい契約をイスラエルに与えることを、神は約

束されました。私たちは、キリストの流された血によって新しい契約が与えられたのですが、そもそもはエレミヤの預言を見ますと、イスラエルと結ばれた契約です(31:31)。

第四に「律法」ですが、これは、モーセを通して与えられたものです。第六に「約束」です、聖書は約束に満ちています。アブラハムに対して、とてつもなく大きい祝福の約束を与えられました。そして第七に、「父祖たち」も彼らのものである、と言っています。これは、アブラハム、イサク、ヤコブのことです。そして、最後に、「キリスト」は、人としてはイスラエルから出てこられました。私たちの主イエス・キリストはユダヤ人なのです。けれどもパウロは、キリストの名を出したら、この方が人であるだけでなく、万物の上におられる、とこしえの神であるとほめたたえています。

## **2A 選びによる神の計画 6-29**

このように心の痛みを述べた後、パウロは、これは神の失敗ではなく、むしろ神が予め立てていたご計画であったことをこれから論じています。

### **1B 召しと選び 6-13**

<sup>6</sup>しかし、神のことばは無効になったわけではありません。イスラエルから出た者がみな、イスラエルではないからです。

イスラエルの肉の子孫、血縁関係を持っている者たちがみな、イスラエルに対する約束を自分のものにしていないわけではない、ということです。イスラエルの名、神に勝利したとか、あるいは神に支配されているという意味のある名前ですが、その名にふさわしい者たちであったかというところではない、ということです。イエス様が、ナタナエルと呼ばれるユダヤ人について、「見なさい。まさにイスラエル人です。この人には偽りがありません。(ヨハ 1:47)」と言われましたが、その名にふさわしいイスラエル人だという意味です。

イスラエルの名にふさわしい、一部の者たち、残りの者たちの存在が、神のイスラエルについてのことばが、無効になっているわけではないことの証拠です。福音書においては、イスラエルの慰めを待ち望んでいたシメオンという老人がいて、幼子イエス様を見て、「御救いを見た」と告白しました(ルカ 2:30)。残りの者たちです。パウロのように、イスラエルのメシア、イエスを信じ受け入れているイスラエル人がいました。

<sup>7</sup>アブラハムの子どもたちがみな、アブラハムの子孫だということではありません。むしろ、「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」からです。<sup>8</sup>すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、むしろ、約束の子どもが子孫と認められるのです。<sup>9</sup>約束のみことばはこうです。「わたしは来年の今ごろ来ます。そのとき、サラには男の子が生まれています。」

イスラエルの血縁の子孫が、自動的に祝福の約束を手に入れているわけではないことを、彼らの

父祖、アブラハム、イサク、ヤコブから論じます。アブラハムには、多くの子孫が与えられました。けれども、必ずしもイスラエル人になっていたわけではありません。イシュマエルが、サラの女奴隷ハガルを通して与えられました。けれども、イシュマエルではなく、サラから生まれる子イサクに祝福の約束が与えられると、神はアブラハムに教えられました(創 17:19,18:10)。そして、イサクが育ち、神がこの子を全焼のいけにえとして献げなさいと命じられた時に、「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。(22:2)」と言われたのです。ひとり子と言われています。ちなみに、イシュマエルはアラブ人の父祖であると言われています。同じアブラハムの子孫ではありますが、イスラエル人ではないのです。

このように、イスラエルに子孫は本質的には、血縁関係以上に、神の約束によるのだということです。ですから、私たち異邦人も、両親がキリスト者だから子はそのままキリスト者ではなく、イエスの名を信じる者が神によって生まれるという約束に基づいているのです。

<sup>10</sup> それだけではありません。一人の人、すなわち私たちの父イサクによって身ごもったリベカの場合もそうです。<sup>11</sup> その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、<sup>12</sup> 行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために、「兄が弟に仕える」と彼女に告げられました。<sup>13</sup>「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と書かれているとおりです。

パウロは、神の約束があつて召されたからこそ、救いのご計画に入っているという話から、さらに突っ込んで、その中に神の選びのご計画があるのだという真理を説き明かしています。イシュマエルではなくイサクが選ばれました。そして、イサクからエサウとヤコブが生まれましたが、ヤコブが選ばれました。同じように、肉のイスラエル人の中でも救いに選ばれる者たちがいる一方で、同じイスラエル人でも退けられた者たちもいるのだということなのです。ちなみに、エサウはエドム人の父祖となりました。イスラエル人ではなかったのです。

神がエサウではなくヤコブを選ばれるとき、それはヤコブが何か良いことをして、エサウが悪いことを行なったから選ばれたのではなく、神ご自身がご自分の思いでヤコブを選ばれました。そのことを証明するために、「<sup>11</sup> その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、<sup>12</sup> 行いによるのではなく、召してくださる方によって進められる」とあるのです。私たちは、恵みによって、信仰を通して救われました。その恵みは、行いによるものではありません。ですから、その恵みは選びによるのです。一方的に憐れんでくださって、この者を救うおうという神からの選びがあつてこそ、恵みがあるのです。

ここで、私たちが自らを戒めなければいけないのは、比較することです。だれかが選ばれて、他の人が退けられているとき、前者が何か優れているものがあつて、後者がそうではないから？という思いは、はなはだ勘違いしています。「なんで、ヤコブだけが選ばれて、エサウは退けられたのか？」と思うならば、「なんで、私がキリストに結ばれる者として選ばれたのか？」を思えばいいで



す。神が不公平だと思うならば、自分自身が救われたことが、もう既に不公平なのです！神の愛は、九十九匹の羊を置いて、一匹の失われた羊を捜す愛です。選びというのは、だれが優れているかという、行いによる選抜ではなく、いかに憐れみを受けたのかという、神の愛の証しなのです。

ところで、「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」というのは、感情を表現したものではありません。エサウを憎たらしいと神が思っていたものではありません。愛する、憎むというのは、あくまでも選択です。プロの造った、ものすごい、食べたいものがいろいろあるけれども、それを退けて、自分のために作ってくれた奥さんの愛情のこもったご飯を敢えて食べるという時に、「私は愛妻弁当を愛し、プロの料理人の食べ物を憎んだ。」というのと似ています。普通なら長男のエサウを選ぶところが敢えてヤコブを選んだというのが、「ヤコブを愛し、エサウを憎んだ」という言葉の意味です。神は、このような、敢えて選ぶところの愛で私たちを愛してくださいました。

## 2B 陶器師なる神 14-23

<sup>14</sup> それでは、どのように言うべきでしょうか。神に不正があるのでしょうか。決してそんなことはありません。

行いが無いのに、ヤコブが愛され、エサウが退かれるのは不公平だという問いです。それに対して、決してそんなことはない！とパウロは断じています。ヤコブはお世辞にも良いことをした人とは言えない、いろいろな欠点がありました。何よりも、エサウだと偽って父イサクから祝福を奪い取った人物です。それでも神は、ヤコブを敢えて選ばれました。神の深い憐れみと愛による、選びです。その選びと召命に応答し、ついに、神に支配されたという意味の新しい名、イスラエルになったのです。私たちも、行いとは別の、神の力強い選びがあるからこそ、キリスト者としての召しにふさわしく歩むことができるようになるのです。

<sup>15</sup> 神はモーセに言われました。「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくしむ。」<sup>16</sup> ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

パウロは、アブラハム、イサク、ヤコブの話、イスラエルの父祖の話をした後で、次に、イスラエルにとって、律法を与えた偉大な預言者、モーセがいます。神がどのように選ばれたか、というと、それが、憐れもうとする神の主権なのだということです。彼の願いや努力ではありません。私たち人間であっても、なぜ自分が何かを愛し、何かのために命を献げるか？という説明はできるでしょうか？できませんね。ただ好きだから好きだし、愛するのも、条件なしで愛しているのです。ならば、なおさらのこと、神が選ばれる時に、そこに選ばれた者たちの願いや努力があったわけではなく、一方的に選ばれたからなのです。その憐れみをもってイスラエルは選ばれました。そしてその憐れみをもって、私たち異邦人もキリストにあつて選ばれました。

ここからうっすらと、なぜユダヤ人の多くが、自分たちのメシアの福音に応答しなかったのかが見えてきます。彼らの願いや努力が足りなかったのではなく、神の何らかの御思いがあって、そうなっているのだということです。そして、ユダヤ人でもパウロのようにイエスを神の子メシアとして信じたのも、神の憐れみによってそうだったのであって、自分たちの努力ではありませんでした。そうすると、私たちの宣教状況も同じことが見えてきます。なぜ、日本人は福音にこれほど頑ななのか？ それについていろんな議論が交わされます。私はあまり意味がないと思っています。願いや努力ではなく、神の憐れみだからです。神が何らかの御思いがあって、そうされていないということです。もちろん、すべての人を神は救いたいと願われています(1テモ 2:4)。けれども、多くの人はまだ信じていないという状況に、神の何らかの御思いがあるのです。

<sup>17</sup> 聖書はファラオにこう言っています。「このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そして、わたしの名を全地に知らしめるためである。」<sup>18</sup> ですから、神は人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままに頑なにされるのです。

パウロはさらに、心を頑なにするという神の主権についても語られます。午前礼拝でも話しましたが、ファラオは初め心を強情にしていたのであり、開かれた人の心を神が敢えて頑なにしたのでありません。強情になっている彼の心を敢えて神はそのままにしておかれ、そこで、ご自分の栄光を、ファラオの頑なさを通して現わされることに決められたのです。それが、十の災いと、過越の祭りによるイスラエルのエジプト脱出、それから、分かれた紅海を渡り、エジプト軍を海の中に沈めることです。聖書には、罪を犯している者たちの心をそのままにして、神がそのようにさせていると表現が多く出てきます。

そうすると、イエス様を迫害したユダヤ人の指導者たちの姿に、使徒たちを迫害するユダヤ人たちの姿にも、神がかたくなにされたということができるといえるでしょう。彼らの頑なさによって、かえって全人類のための罪の贖いのご計画である、御子の死と犠牲が実現したのであり、彼らの頑なさによって、異邦人への救いの道が開かれたと言って過言ではないからです。私たちは、人々が福音に頑なになることを悲しみをもって見ますが、けれども、それでも神がその背後で働いておられて、このことを用いても、ご自分の栄光を現わすのだと信じることができます。世界宣教で、急速に福音が信じられている国々には、政府がキリスト者を弾圧しているところが多くあります。神が敢えてファラオのように頑なにされて、それで人々がご自身を求めようようにされているとも言えるのです。

<sup>19</sup> すると、あなたは私にこう言うでしょう。「それではなぜ、神はなおも人を責められるのですか。だれが神の意図に逆らえるのですか。」<sup>20</sup> 人よ。神に言い返すあなたは、いったい何者ですか。造られた者が造った者に「どうして私をこのように造ったのか」と言えるでしょうか。<sup>21</sup> 陶器師は同じ土のかたまりから、あるものは尊いことに用いる器に、別のものは普通の器に作る権利を持っていないのでしょうか。

神の主権に言い逆らうこと自体が、人間のあり方を否定している矛盾した姿であることを、午前礼拝で学びました。私たちは神の似姿に造られた者たちですが、所詮、造られた者なのです。ところが、何でもかんでも権利があるかのように思いこみ、神の思い計っていることに言いがかりをつけるのです。黙示録 4 章には、天において礼拝と賛美がありますが、24 人の長老がこう告白しています。「4:11 主よ、私たちの神よ。あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」私たち被造物は、神のみこころ、神の願われるままに存在しています。ですから、私たちが神の意図されているところに留まることによって、初めて満足を得ることができます。

今の時代、神の主権ということが最もないがしろにされている時代だと言えるかもしれません。自分に与えられている自由や権利が当たり前であるかのようにみなしています。それで、自分たちがまるで神であるかのように思いこみ、神と神の立てた秩序がいかに間違っているかと責め立てるのです。こうした人間中心主義こそが、世の終わりに現れる反キリスト、獣の特徴なのです。「黙 13:5-6 この獣には、大言壮語して冒瀆のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。6 獣は神を冒瀆するために口を開いて、神の御名と神の幕屋、また天に住む者たちを冒瀆した。」

そもそも、神は主権者です。だから、神がご自分の造られたものを、似ても焼いても一向にかまわないのです。しかし、主権者なる神が良いお方であり、公正で真実で、ご自分の造られたものをこよなく愛される方なのです。ここに、福音があります。福音は、私たちを火で焼くことのできる権利を持った方が、敢えてご自分の御子を犠牲にして愛してくださった、ということなのです。

<sup>22</sup>それでいて、もし神が、御怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられたのに、滅ぼされるはずの怒りの器を、豊かな寛容をもって耐え忍ばれたとすれば、どうですか。<sup>23</sup> しかもそれが、栄光のためにあらかじめ備えられたあわれみの器に対して、ご自分の豊かな栄光を知らせるためであったとすれば、どうですか。

神は、ファラオをご自分の御怒りを現わす器とされていましたが、その器にも同じように寛容を示しておられました。「出エ 9:15-16 実に今でも、わたしが手を伸ばし、あなたとあなたの民を疫病で打つなら、あなたは地から消し去られる。16 しかし、このことのために、わたしはあなたを立てておいた。わたしの力をあなたに示すため、そうして、わたしの名を全地に知らしめるためである。」ファラオがいつまでも強情であることを、神は予め知っておられました。そしてすぐにでも、神はファラオを滅ぼすことができになったのです。しかし、神が彼をすぐに滅ぼさなかったのは、ファラオ自身に、悔い改める機会を与えておられたのです。イエス様は、イスカリオテのユダにそのことを行われていましたね。彼は滅びの子であり、聖書に書かれているように、滅ぶことが分かっていたのにも関わらず、イエス様はイスカリオテのユダに最後の最後まで、悔い改めの機会を与えておられました。



そして、寛容を示しながら、憐れみを受けるイスラエル人たちに、ご自分の豊かな栄光を示し続けていかれたのです。異邦人についていうならば、ユダヤ人の頑なさによって、かえって自分たちを神が顧みてくださったことを知り、その恵みの栄光を知るようになったのです。

### 3B 異邦人への選び 24-29

パウロは、神の選びと主権をこれまでしっかりと語って、その上で、キリストにあって異邦人をも、憐れみの器として選ばれ、召したのだということを論じていきます。

<sup>24</sup> このあわれみの器として、神は私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。

パウロは、ここでようやく、8章までで論じてきたところに戻っています。イエス・キリストを信じる信仰によって、ユダヤ人だけでなく異邦人も義と認められるのだ。それは、神の選びのご計画があるからであり、予め知られている者たちが、御子の姿に変えるように予め定められたのだということです。異邦人は、イスラエルに与えられた選びと召しを、キリストにあって、ちょうどおこぼれをいただくような形で、いただいているのです。

覚えていますか、ツロとシドンの地方にいた、カナン人の女が、娘から悪霊を追い出してほしいと願ったことについて、イエス様は、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」と言われましたが、女は、「主よ、そのとおりです。」と認めたのです。「あなたは、差別されないのだから、当たり前ではないですか！」とは言わなかったのです。その通りだと認めてから、「ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」と言っています。(マタイ 15:26-27) おこぼれをいただいているのです。

<sup>25</sup> それは、ホセアの手紙でも神が言っておられるとおりです。「わたしは、わたしの民でない者をわたしの民と呼び、愛されない者を愛される者と呼ぶ。<sup>26</sup> あなたがたはわたしの民ではない、と言われたその場所で、彼らは生ける神の子らと呼ばれる。」

このホセア書の手紙では、アッシリアに捕え移された北イスラエルの民が、その時は「わが民ではない」との宣言を受けましたが、彼らが必ず戻ってくるといって、「わが民、愛する者」「生ける神の子ども」と呼ばれるということです。文脈はイスラエル人に対してのものなのですが、けれども、原則は異邦人に当てはめることができます。愛されていない者、わたしの民ではない者であったのに、神が愛されている者、生ける神の子らと呼んでくださいました。

<sup>27</sup> イザヤはイスラエルについてこう叫んでいます。「たとえ、イスラエルの子らの数が 海の砂のようであっても、残りの者だけが救われる。<sup>28</sup> 主が、語られたことを完全に、かつ速やかに、地の上で行おうとしておられる。」

神の預言の中に元々、イスラエル人が福音に応答する数は少ないことがあったのです。神のご計画の中で織り込み済みだったのです。ですから、パウロたちが福音を語り、肝心のユダヤ人たちが受け入れないという現実、神の中では驚きではなく、予め知っておられたということです。ここは、アッシリアによって捕え移されることについて神が語られていて、それでも神に立ち帰る者たちはわずかに、残りの民が立ち帰るのだということを話している部分です。そこから「残りの者」という言葉が使われています。イエス様の名を呼び求め、救われる者たちは多いわけではない、残りの民のみが応答するのだということです。

<sup>29</sup> また、イザヤがあらかじめ告げたとおりです。「もしも、万軍の主が、私たちに 子孫を残されなかったなら、私たちもソドムのようになり、ゴモラと同じようになっていたであろう。」

これも大事な原則です。残された民がいるということで、主はその民全体を滅ぼさないとお決めになっています。イスラエルに残された民がいたので、イスラエルはソドムやゴモラのようにならなかったのです。ソドムとゴモラでさえ、主は、もし正しい人が十人でもいたら、全体を赦すとアブラハムに話しておられましたね。

ユダヤ人でイエスを信じる者たちはとても少なかったのですが、ずっと途切れることなく、今に至るまで綿々と存在してきたのです。今でこそ、ユダヤ人であることを全面に出したキリスト者である、メシアニック・ジューの存在が知られるようになりました。しかし歴史の中では、キリスト者として知られていてもユダヤ人であるということはほとんど知られないで存在してきました。例えば身近なところでは、今の沖縄、琉球に初めて宣教に入ったベッテルハイムは、イギリス国籍のユダヤ人でした。今、イスラエル人たちがいるということは、主が決してイスラエルの民を見捨てておられず、滅ぼしておられないことを示しておられ、残りの民である、イエスを信じる者たちが存在しているということなのです。

### **3A 義の求め方 30-33**

30 節から 33 節は、実は 10 章のほうの内容、つまり新しい内容に入っているのではないかと思います。これまでは、神の選びの計画があって、ユダヤ人の多くが福音を受け入れていない、かえって異邦人が受け入れているというのも、実はご計画あつてのことなのだとことです。けれども、ここから 10 章においては、それでイスラエル人に責任がなかったということではなく、彼らが福音を聞いて、信じなかったという問題があるのだと話していきます。

<sup>30</sup> それでは、どのように言うべきでしょうか。義を追い求めなかった異邦人が義を、すなわち、信仰による義を得ました。<sup>31</sup> しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めていたのに、その律法に到達しませんでした。<sup>32a</sup> なぜでしょうか。信仰によってではなく、行いによるかのように追い求めたからです。

パウロが、イスラエル人が福音を受け入れず、異邦人のほうがかえって受け入れたメカニズムを説明してくれています。義を追い求めていたのはイスラエル人です。神に知られ、神の選ばれていた彼らこそが、神の聖と義を示す律法を持っており、当然ながら義を求めていたのです。ところが、その義に到達できませんでした。異邦人は、そんなことをしていなかったのに義に到達しました。この逆説は、イスラエルが、かえって行いによるかのように義を求めてしまったからです。異邦人は、そんなことを知りませんでしたから、聞いたこと、言われたことをそのまま信じて受け入れ、救われたのです。これが逆説的なことが起こっている理由です。

教会の中でも、同じことが起こりますね。真面目な人が教会には多いと思います。いや、みなさん真面目です！けれども、どこにおいて真面目なのか？ですが、信じることに於いて真面目なのです。神のことばを聞いて、信じることです。ところが、自分の行いを良くしたいと思っ

てきていると、必ずつまずいてしまいます。もうこんなのやっつけられないと思って、教会にはいられなくなります。自分が全否定される気分になるからです。そう、私たちは死ななければいけませんから！罪に対して、そして律法に対しても死んでいるとみなさないと、キリストに結ばれた生活ができませんね。

それが、イスラエル人の中でも起こりました。一見、行いにおいてはどうしようもない遊女や取税人がイエス様のところに来ました。取税人ザアカイが、イエス様とそのことばに飢え渴いていました。だから、悔い改めて、奪い取ったものを返済しましたね。けれども、律法学者やパリサイ人たちは、批判して、非難して、反発して、ついにイエスを殺そうと願いました。それは、自分たちのしていることで、義を達成しようとしていたので、イエス様のことばによってそれが完全否定されていたからです。

32b 彼らは、つまずきの石につまずいたのです。<sup>33</sup>「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。この方に信頼する者は 失望させられることがない」と書いてあるとおりです。

主ご自身は、石です。聖書には、イスラエルに多い石のたとえが多くあります。救い主である神は、石や岩に例えられます。シオンとは、エルサレムのことです。エルサレムに、メシアが来られるが、この方を信頼すれば救われるけれども、同じ石はつまずきの石にもなるということです。信じれば救われるのですが、行いであるかのように求めれば、失望し、いらだち、怒り、妬むことさえする、ということです。みなさんは、いかがでしょうか？つまずいていますか、それとも救われていますか？その鍵は、聞いて信じて、自分のものを捨てるということです。